

メールで豆まき談義

今年は124年ぶりに2月2日が節分でした。ピヨピヨ保育園ではその日が近づくとい鬼の絵本を読んでもらったり、鬼役になる年長は小さい子たちには内緒で鬼のお面をつくったり。

前日にはイワシを焼いてもらって、みんなでイワシの頭をヒイラギの葉といつしよにあちこちにぶら下げました。幼児は節分の歌をうたい、年長は追出ししたい「自分の中にいる鬼」がどんな鬼なのかを教え合っています。当日のおやつには恵方巻きを食べます。

さて肝心の豆まきですが、今年は消費者庁から5才以下の幼児に豆を



炒り豆の代わりに紙つぶてを投げた豆まき

コロナと子どもの居場所

事の始まりはいつでしたでしょうか。
 確か一昨年の秋頃だったと思うのです
 が、海外のニュースで度々聞くようになり
 ました。しかし正直他人事で自分には
 関係ないものだと思っていました。少し
 ずつ他の国にも広まり、いつの間にか国
 内のニュースの話題にもなっていました。
 それでも保育はいつも通り続いてい
 て、例年通りの日々を送っていました。
 保育の変更をせざるを得ない状況にな
 ったのは昨年の2月だったでしょうか。
 毎年恒例行事の内容を交流園の園長た
 ちと緊急に協議したことで、私自身よう
 やく実感を持つようになったことを覚
 えています。今思うと随分のんびりして
 いました。

その後の園行事も日常の保育も今まで経験したことないような対策を必要とされました。幼稚園・保育園は人間関係を築く術を身につける場だと思っています。その為には人と人とが絡み合い、密になることで感情を共有でき育ち合うはずです。それまで保育の中で当たり前のようにやってきたことが途端に制限させられ、真逆の対応、密にならない保育を卒園式まで続けました。正解、線引き、加減が分からないまま保育の縮小、行事の中止、制限ばかりで気が休まらないまま新年度が始まりました。園内の空気は重くピリピリしていましたが、季節の変化に合わせて感染状況も変わり、気持ちも緩んでいったのでしょうか。辛い現実から目を背けるように制限も緩め、やりたい保育を優先した結果、昨年12月に園内から陽性者が出てしまいました。すぐに行政の立ち入りに追われ、何度も確認されたことがマスク着用の有無でした。子どもたちと表情のやりとりを、言葉にならない想いを伝え合うことを優先してきた結果が休園措置となってしまったのです。

今でも持論は変わりません。大切にしてきたものはこの先も守ります。ただ優先すべきは、子どもたちの居場所を保障することです。休園になったことで子どもたちの居場所を奪ってしまいました。今後それだけは避けなければなりません。まだまだ厳しい状況は続くでしょうが、保育の継続さえできれば、子どもたちは居場所さえあれば育ち合う可能性は必ずあります。(ひかり幼稚園)

食べさせないようにとの通達が来ました。ピヨでは盛大に炒り豆をまいたあ

とすぐに掃除するのですが、小さい子がひろって食べてしまうことが絶対にならないとは言いきれません。命を守るために豆まきはやめるべきか？豆まきをしないでピヨピヨが大事にしている伝統文化は守れるのか？職員は大変悩みました。

そこで南埼玉地区の各園にメールでこの「豆まきどうする問題」を投げかけてみました。

するとやはりどの園でも通達をうけて悩んでいるということがわかりました。炒り豆で豆まきをするというところと、豆の代わりのものをまくところがあるりましたが、いずれも子どもがのどを詰まらせる事故のなように工夫していました。

たとえば豆をまく場合は近所の神社の境内とか竹林に出かけていってまくとか、乳児組が入れないように部屋を閉め切つて掃除要員を配置してまくということでした。一方、豆の代わりにちぎつた和紙や新聞紙をまるめたもの、あるいは紙粘土で作つた大きめの玉を豆の代わりに鬼に投げつ

はそれぞれですが、どの園でも絶対に事故をおこさないように、職員たちが話し合って安全な方法を採用していました。ピヨピヨでも議論の末、新聞紙を丸めて豆の代わりにすることになりました。

メールを回しながら各園の話合いの内容を集めていくうちに、多くの園で豆まきの議論がより根本的なところまで掘り下げられていく様子が見えまわりました。

「正直ものすごく悩みましたが、これは職員に頼るしかないと思いみんなで意見を出し合いました。すると園外活動（散歩）、遊具の一つ一つ、木登り、睡眠チェック、どこからでも

が危険要素を持つていることに気がつきました。……保育は危険と隣り合わせであることを常に伝え合い、保育を楽しむことが大事だとなりました。」ある園長先生からのメールにそうありました。

危険を予測し、かつ楽しむこと。この楽しさと危険の2面性は、節分行事に限らず日々のさまざまな場面に見られる私たちの保育の特質であり常に意識していなければならないことです。基本を見つめ直すきっかけになった「豆まきどうする問題」でした。

(ヒヨピヨ保育園)

今できる保育を

11月の終わりに茨城にある愛宕山へ行きました。例年は桜の季節に出かけていましたが、緊急事態宣言と市から登園自粛のお願いが出ていたため、秋に出かけることにしました。

紅葉、落葉が始まっていて、昨年の春山の様子との違いを感じて仲間と話している子どもたちもいました。森の中を、登ったりぶら下がったりするの

におもしろいような枝やつるで遊んだり、木の実や落ち葉のきれいなものを見つけたりしながら歩きました。頂上まで行くと、ぽつかりと視界が開けて周りの山や森が見えて気持ち良くなりました。

山の中を流れる小川を、目指して探検をしました。久しぶりの遠出ということもあり、子どもたちは楽しくて仕方がない様子で、めいっぱい遊んできました。

12月の終わりには、市内の感染者数が増え、保育園でも休園期間が必要になる園が複数出てきて、再び市から登園自粛の願いが出ました。

きていませんが、内容を工夫し、保護者の協力も得て保育をしています。

年末には鏡餅を作ったり、クリスマスお楽しみ会をしたり、年が明けてからは年長さんがこま回しやまりつき

A group of children and adults are gathered around a large, thick tree trunk in a forest. The children, some wearing backpacks, are touching the bark of the tree. The ground is covered with fallen leaves.

愛宕山の登山の途中で見つけた大木を囲んで

園長会と年長部会

を楽しんでいます。「子どもたちのために、今できることってなんだろうね。大事にしたいことって何だろうね。」職員間で話し合いながらの一年になりました。(わらしこ保育園)

きる南埼玉の仲間にも励まされました。また、同時に各年齢の部会も持てずに来て、最終学年の年長担任は悩みを共有できる仲間と繋がれず孤独に感じているのではないかと、園長会で提案され、12月に年長部会を開催することができました。世の中は随分オンラインでの会議、学習会が定着してきました。情報を共有することや、学びの機会が保障されることは悪いことではありません。しかし、オンラインで保育を語り合うことの難しさ、違和感を解消できず、会場に足を運んでの開催となりました。換気とマスク着用を徹底しながら、12月までの描画を持ち寄り、担任一人ひとりの顔を見ながら報告を聞くことができました。

コロナの感染拡大が世間で広まっていく中、なんとか保育園を守らなくてはと、正解の分からない対応・対策にどの園も苦悩が絶えない日々を送ってきました。私たちの交流も、昨年2月の交流合宿を最後に顔を合わせることができませんでした。

なんとか園長会を開催しようと意を決して10月末に開催し、近況報告を出し合い、コロナの対応や悩みを出し合いました。実に8か月ぶりとなった園長会は、顔を合わせることで、語り合うことの大切さを実感し、ホッとで

求なくして発達課題はない』という二
ユース内容が紹介され、学びの大切さ
を共有しました。

保育者の目の前にいる子どもは100
人皆違うけれども、その子を支える
手は担任をはじめ園の職員集団であ
り、交流園の仲間であると思います。
子どもを語るこの意味を実感でき
る交流会となりました。(つくしんぼ
保育園)